

## 第8回 技術士との対話会を開催しました。

—2016年11月12日（土）矢上校舎にて

慶應技術士会では、2009年の結成時より現在まで、通年にわたり様々な活動を行っております。特に、当会では、活動方針として、大学との連携を重視しています。

これにあわせて、当会では、毎年、日吉校舎の銀杏並木が山吹色に染まる晩秋から初冬にかけて、土曜日の午後に、「技術士との対話会」を開催しています。

これは、当大学出身の技術士と、現役の理工学部の大学生・大学院生が、教授の同伴・指導のもとに、校舎の一室を借りて集い、ケーキと紅茶・コーヒーとともに、一つのテーブルを囲んで、「技術士とは」「働くということ」「資格とは」などをテーマにして、懇談・対話をする懇話会です。

2016年11月12日（土）に、矢上校舎：創想館にて開催された本会の様子を報告します。



【日吉交差点から校舎を望む】



【陽光を反射する矢上校舎】

当日は、快晴の秋空の下、理工学部矢上校舎に向かいました。

日吉駅を降りると、大学に向かう銀杏並木が晩秋に向かって黄金色になり始めておりましたが、一方で、樹種によっては夏を惜しむかのように、ひとひらの緑を謳歌しており、都心では気づかない季節の移り変わりを感じることができました。

当方、湘南藤沢キャンパス（SFC）に、かつてお世話になりましたが、キャンパス内に大きな池があって、緑と水と生き物が豊かであり、自然の風を感じることができるキャンパスとして今でも鮮明に記憶に残っております。社会に出て、学会やシンポジウム、講演会などで、慶應ではない大学に行く機会が幾度もありましたが、三田や信濃町も含めて、個々のキャンパスに豊かな緑木と植栽があるのは、慶應が唯一ではないか、と思います。

当日は土曜日でしたが、キャンパスを歩きかう人々が多く、風に揺れてざわめく木の葉の騒がしさとともに、若者の持つ活気を感じる瞬間でもありました。



[学生諸君が行きかう日吉交差点]



[ひとひらの緑を残す銀杏並木]



[山吹色付く銀杏並木]

対話会は、まず、小川先生の開催挨拶から始まりました。

「教員には、技術士は一人もおりません。慶應は、OB/OGが現役生を強力にバックアップする大学である。貴重な機会ですので、社会での経験を存分に聞いていただきたい。」



[小川先生の開催挨拶]



[白板右側 :左から小川先生、大宮先生]

続いて、慶應技術士会 石井会長より、開催挨拶がありました。

「これからOB/OGが話すことは、若い方々にとって、役立つこともあるであろう。働いていく上で、技術士は、励みになるし、技術士の会報等に掲載されている様々な情報は、有用である。私の経験上の話であるが、技術士の印（サイン）がなければ、海外に輸出できない製品もある。黙っていると、年配者は話が長いし、止まらないので、せっかくの機会ですから、学生は遠慮なく話をして、質問し、知りたいことを率直に聞いてほしい。」



[石井会長の開催挨拶]

続いて、進行役の蔭山幹事より、日本技術士会の紹介、また女性技術士会を紹介する資料の説明がありました。また、今回の対話会に参加しているOB/OGの経歴を以後、1名3分程度で紹介すること、途中で対話のグループ入れ替えがあることの説明がありました。



[蔭山幹事の司会進行]

次に、参加者より、簡単な自己/経歴紹介がありました。公務員を退官された後、培った技術を生かし新たな環境で活躍されている方、海外での業務経験が豊富で、20年を超える方もおりました。一方、昨春に大学院を修了して、会社の技術研究所に入り、第一歩を踏み出したフレッシュウーマン、建設関係の現場で指揮・監督に奮闘する方など、慶應OB/OGの層の厚さを感じた瞬間でもありました。

\*-----\*-----\*-----\*-----\*

その後、2つのグループに分かれて、対話会が始まりました。

参加者：当技術士会 大学OB/OG 7名 (うち女性1名)

現役大学生/大学院生 5名 (うち女性1名)



[対話会 懇談前]

当方、対話会では、まず開口一番に、学生諸君に質問する事があります。

「JABEEの授業を受ける前に、『技術士』という資格を知っていましたか？」

すると、知っていた、という学生は皆無であり、一方で、

「『弁理士』という資格は知っていましたか？」

と言うと、今まで知らなかった、という学生は、1人もいない。もちろん、慶應の学生ゆえに、理工系ながらも憲法や法律に興味があり、工業所有権、著作権などに関心があつて、なおかつ、発明に直結する機械工学科の学生だから、というのもあると思うが、やはり知名度としては、弁理士の方が格段に上である。最近では、TPP関連のニュースにおいて、国同士での特許の流通・取引が話題になったり、数年前だと、ノーベル賞を受賞したiPS細胞に関連した特許の申請が盛んになっていることが、テレビ・新聞に取り上げられたりしたことが要因と思われる。

弁理士は、いわゆる知的財産（以下、知財）を権利化して、例えば特許とすることができるが、一方、技術士は、知財を創発したり、それを生かして新たな製品を開発する立場にある、という、皆、学生は、驚いた顔をする。

医師は言うにおよばず、弁護士、公認会計士などは、度々テレビドラマの題材になり、その仕事ぶりとともに、生き方・人生哲学・周辺の間人模様が複雑に絡み合い、物語のシナリオとなるが、技術士には、そのようなドラマは、私が知り得る限りでは、今まで見たことが無い。これは、技術の場合、まず表に出るのが、開発した「製品」であり、または建造したトンネル・橋梁などの「構造物」であつて、あるいは飛行機や新幹線などの「乗り物」であつて、まずモノにスポットライトが当たる。開発したモノはもちろんのこと、開発したヒトに「ずっと寄り添って」関心を当てるのが、即ち一過性ではなく、継続して関心を持つことが難しい、と考える。

誰が作ったんだろう？、何がきっかけで作ったんだろう？、 どのようなデザインコンセプトでこの形になった？ 作った後は、その製品の運命は、どうなるのか？

思うに、次から次へと新しい商品、アプリケーションが開発され、映像・音声が流れては、過去の事象がデジタルデータとなって埋もれていく現代でもある。このような世相では、「ずっと寄り添う」ことが難しく、時に、コツコツと実験し、幾度も設計を修正して、時間をかけて技術を創発し、失敗を繰り返しながら、製品/新技術を開発し得る技術士の知名度が、低い原因にもなっているのではないか。

まず、若い世代には、技術士の魅力、知名度を、種々の手段を講じて上げていく必要があると感じた。





[懇談の様子 1]

次に、学生からの質問であるが、多いのが、技術士の資格が役立つのはどのような場面か？という質問である。

これに関しては、まず、業務独占と、名称独占の違いを説明している。例えば、建築士は、その資格がないと、他人から報酬をもらう「業」として、一定規模以上の建物の設計・行政手続などを行ってはならないが、技術士の場合は、そのような制限はない。この面においては、業務独占の方が、名称独占よりは、はるかに分がある。

しかし、業界によっては、技術士の取得者がプロジェクトメンバーにいたることが、入札要件になっている場合があり、資格がないと業務にも携われないし、管理技術者にもなれない、ということをお話すると、学生たちの表情もなるほど、と納得の表情を示した。

////////////////////////////////////

当方の経験上の位置づけではあるが、特許事務所においては、技術士は、弁理士と同等か少し下、建設業界においては、年配の一級建築士に対して、技術士の資格があれば若い者でも、一目置かれ、技術的にこみ入った打ち合わせができる。あるいは、この資格がないと、技術部長に昇進できない会社や業界もある、という話をした。

資格としては、合格率から考えると難関の部類である。持っている、例えば公務員の中途採用での応募要件になり（自治体などの採用試験や、警視庁のサイバー捜査官の警部補での採用）、別の国家試験の科目が一部免除になるなど（弁理士試験の選択科目）、有利なことが多い、と話す、手元の資料を見る学生の表情が真剣になってくるのが感じられた。



[懇談の様子 2]

次に、技術士になるにはどのような課程を経たらよいのか？という質問であるが、これには極力簡単に答えるようにしている。理由は、Webで検索すれば、膨大な情報があるし、大きな書店にいけば、「技術士コーナー」があるからである。

むしろ、技術士試験の、「独自性」について説明している。

①まず、医師国家試験、司法試験は、大学を出てからすぐに受験できる試験であり、実務経験は要しない。その試験に合格したのち、その業務を独占的に開始することができるスタートラインの資格である。公認会計士も、受験は直ちに可能ではある。

②一方、技術士の場合、少なくとも4年間の実務経験を要する。さらに、一次試験の合格を前提としている。これは、公認会計士合格者が、会計士補となる逆の順序である。

③さらに、口述試験があり、その時間は、弁理士、中小企業診断士の口述（面接）試験に比べて、長い試験時間である。

④筆記試験は、空欄補充、解答肢選択、という設問ではなく、設問の分量は少なく、自分で起承転結の論理を組み立てるといふ論述試験が主である。

このように説明した上で、日々の業務において、問題意識を持ち、惰性で仕事をするのではなく、わからないことを調べ、知らないことを学んでいくのが、試験対策にもなるという説明をすると、実務経験が無いながらも、納得した様子であった。

=====

次に、学生からは、いつから技術士になろうと思ったか、という質問がある。

これについては、学生の関心が最も大きい。というのは、就活を控える学生にとって、人生の先達が、いつ、どのように決断し、選択をしてきたか、を知りたいからである。

これについては、当方も、まず技術士という資格を、大学4年生の卒業間近までは、知らなかった、教授が話していたのを聞いて知り、そのときはそれ以上、関心がなく、調べ

たりも聞いたりもしなかった、という状況であった。（当時は、インターネットもEメールも携帯電話もなかった。NECのPC9801が全盛期であり、パソコン通信が始まったばかりであった。モバイルに関しては、院生のとき、ポケベルが出始めた。今のように、簡単に「検索」できる時代でなかった。）

新卒後、会社に入り、その業界が建設業界であったことから、技術士の資格の話題を聞くようになり、受験に至った、という状況である。合格すると、受験費用の補助があり、かつ報奨金が出て、毎月の資格手当も付くことも、動機になった。

今度は、慶應技術士会の技術士から、今、技術士になりたい、と思いませんか？という質問を学生にしてみると、直ちにそうしたい、という意見はなかった。至極、それは当然と思った。

大学生にしても、院生にしても、先に控える就活に最も関心がある。資格取得よりも、民間会社に入ってビジネスマンとなるのか、あるいは会社の技術研究所に入って研究員となるのか、または大学に残り、ドクターを目指すのか、公務員を目指すのか、日々、迷っている、という意見を、毎年、対話会で繰り返し、よく聞く。

当方も、院生の時に、テレビ業界への就職に興味があり、某放送局のディレクター職を受験し、50倍超という筆記試験の倍率を突破して、採用のための集団面接（模擬ではない）を経験した。

学生には、ひとつのアドバイスとして、あなたの周囲の人の、自分に対する意見を聞くことを、ためらわないように、と言っている。

テレビドラマ、小説などに憧れて、進路に迷った場合は、人生選択の指針とするのもよいが、それらは、脚色されていることもある。

他人は、自分以上に自分のことを見ている。身内、友人などはもちろんであるが、大学の先生は、教育のプロでもあるので、日々、自分のことをよく見ている。その意見を、迷った場合は、参考にするのが良い、ということ伝えてる。

現段階では、技術士という資格があり、それを生かした業務、それを生かせる業界がある、程度の認識でかまわない、と説明した。



[矢上校舎に至る]



[日吉校舎からの途中、矢上校舎を望む]



[矢上校舎 入口 遠景]

海外で仕事をしたい希望があるが、実際は、希望すれば行けるものなのか？という質問もあった。

当方の経験上、自分が希望すれば、そのチャンスは多い、と考える。特に、日本の技術を必要としている海外の国々（特に東南アジア）は多い。社会インフラ整備（巨大構造物の建設・水再生技術）、防災技術、自動車関連技術、発展途上国での教育などは、ニーズもあり、海外に行きたいという希望とその実績は、後々になって、周りの高評価につながると思われる、と説明した。

最後に、会社に入ってから、仕事をしながら、新たに学ぶこと、例えば、社会人として博士課程に行くことはできるのか？という質問があった。

博士課程ではないが、当方の知り合いで、文系の学部を卒業したあと、働きながら、社会人大学院で修士課程を出た者（女性）がいる。周りの協力もあると思うが、十分可能なのではないのだろうか。

また、技術士は、職業訓練校の教官の募集や、国主管の技術研究所の研究員の募集などの場合、博士号と同等の評価を与えられる場合もある。JABEE課程を経ていれば、二次試験から受験できるので、積極的に挑戦して欲しい、という話をした。

以上、対話会は、話題が尽きないところではあったが、悔しくも時間となった。議論盛況ではあるが、今後、疑問・質問あれば、メール等にて対応しますので送ってほしい、との蔭山幹事の挨拶で、対話会は終了となった。

//\*-----\*//

今後も、技術士資格の普及を進めつつ、20年の先輩として、学生の一助になれば、と思い、日吉の銀杏並木を後にした。

力強く天に向かう木幹の間々に、山吹く銀杏の葉に視線を遮られながら、キャンパスを歩き交う学生を見た。20年を超え、自分の学生時代の出来事が、普段、記憶の深い所に埋



もれて、到底、思い出されないことが、学友が、お世話になった先生が、一瞬でよみがえる。それは風に吹かれた銀杏の木の葉のように、少しだけ、ざわざわと、周りで音を立てたあと、陽光を反射して、すぐに散って消えた。

当方、技術士になって10年が経った。1年前から、新たに自己の技術領域を拓けるべく、技術士に匹敵する資格に今、挑戦している。日々、学ぶにつけ、知るにつけ、まだまだ知らないことばかりであるし、近年の技術の進歩に驚いている。

今日は、学生との対話を通じて、教わったこともあった。半学半教の精神を忘れずに、また来年、ここに来たいと思う。

[ 記事作成：慶應技術士会 ]